

タイトル	R. J. ツヴィ・ヴェアブロウスキー〔ユリウス・グットマン『ユダヤ教の哲学玄』（英語版）への〕序文（訳者解題と翻訳）
著者	佐藤，貴史； SATO, Takashi
引用	北海学園大学人文論集(77): 47-52
発行日	2024-08-31

R. J. ツヴィ・ヴェアブロウスキー
〔ユリウス・グットマン『ユダヤ教の哲学』（英語版）
への〕序文（訳者解題と翻訳）

佐藤 貴史

〔訳者解題〕

ここに訳出されたのは R. J. Zwi Werblowsky, “Introduction” in *Philosophies of Judaism. The History of Jewish Philosophy from Biblical Times to Franz Rosenzweig*, written by Julius Guttman, translated by David W. Silverman (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1964) である。ユリウス・グットマンの名著はすでに合田正人の翻訳によって『ユダヤ哲学』（みすず書房、2000年）として出版されている。「訳者あとがき」によれば、合田は上記の英語版を底本と用いたが、そこに付された R. J. ツヴィ・ヴェアブロウスキーの「序文」は割愛したようである。この「序文」は非常に簡潔なものであるが、グットマンの生い立ちのみならず、彼の思想史的背景や宗教哲学の方向性、そして哲学者であることと歴史家であることの緊張がよく示されている。とりわけいまではすこぶる評判が悪い、宗教への本質主義的アプローチを正面に据えたグットマンの宗教哲学が説明されており、この「序文」はグットマンの宗教哲学、そして19世紀のドイツ・ユダヤ思想史を考察するうえで重要なテキストであることは間違いないだろう。

本翻訳は、合田による驚嘆すべき仕事『ユダヤ哲学』をより完全なものにするために訳者が勝手に行ったことである。「訳者あとがき」によれば、合田がエマニュエル・レヴィナスを訪ね、ユダヤ思想について教を乞うたとき、彼は間髪入れずグットマンの書物を推薦したそうである（合田正

人「訳者あとがき」『ユダヤ哲学』, 455頁)。わが国でもグットマンの思想がもっと広く紹介されることを願ってやまない。なおグットマンについては、合田による「訳者あとがき」に加えて、拙著『ドイツ・ユダヤ思想の光芒』(岩波書店, 2015年)も参照されたい。

〔ユリウス・グットマン『ユダヤ教の哲学』(英語版)への〕序文

R. J. ツヴィ・ヴェアブロウスキー
佐藤 貴史 [訳]

〔翻 訳〕

イツハク(ユリウス)・グットマン(YITZHAK (Julius) Guttman)は、近代のユダヤ的学識の気高い伝統のもとで生まれた。その伝統は、いくぶん近づきがたい名前であるユダヤ学(*Wissenschaft des Judentums*)をよそに、ドイツ・ユダヤ人のあいだで何とも注目すべき開花期を迎えていた。彼の父親ヤーコブ・グットマン(Jacob Guttman, 1845-1919)は、ヒルデスハイム(1874年から92年まで)とブレスラウ(1892年から彼の死に至るまで)のユダヤ人コミュニティのラビとして奉仕した。学者としてヤーコブ・グットマンは中世ユダヤ哲学史を専門とし、ユダヤ教の哲学的思考とキリスト教のそれとのあいだの相互関係に関する研究だけでなく、イブン・ダウド、サアディア、ソロモン・イブン・ガビーロール、マイモニデスに関する論文やモノグラフを公にした。

家族がブレスラウに引っ越したとき、ユリウス・グットマン(1880年生まれ)は12歳だった。ここでこの若き学徒は、父が示した模範を通じて彼がすでに慣れ親しみ、そして彼の知的発展に大いに相応しいと思った同様のユダヤ的・学術的雰囲気を感じた。ブレスラウ・ラビ神学校は、ユダヤ学の父の一人であるツァカリヤス・フランケルによって1854年に創設されて以来、ユダヤ的学識の中心地であった。グットマンはユダヤ教、セム系諸語、そして哲学研究の訓練をラビ神学校とブレスラウ大学の両方で受

けた。彼は1910年から1919年までブレスラウで、1919年から1934年までベルリンのユダヤ学高等学院で講義を行った。1934年、彼はエルサレムのヘブライ大学でユダヤ哲学の教授に任命され、そこで1950年に死を迎えるまで教えた。

一般哲学のあらゆる主要分科に十分に精通したことで、グットマンの関心はみずからの世代のドイツ人思想家ととくに関係する諸問題に向かったのはまったく自然なことであった。新カント派の復興（そこではヘルマン・コーエンの名前もまた結びつけられている）についてとりわけ言及されるべきであり、それはグットマンをカント研究へと導いた。また、哲学者たちが社会学や社会学的視点にどんどん熱中していったことにも触れられるべきである。後者の関心は、結果的にグットマンが著したゾンバルトやマックス・ウェーバーの著作に関する重要な批判的エッセイとして結実した。

しかしながら、これらの社会学的論文でさえ、ユダヤ教の特質や本質という問いに対するグットマンの根本的な専心を証言したのである。ウェーバーの著作について書かれた書評の直接的原因が後者によるユダヤ史に対する彼の社会学理論の応用であったように、グットマンのエッセイ『ユダヤ人と経済生活』（1913）において考察されたのは、資本主義の精神に対するユダヤ教の本質的・内的関係を支持する議論を行った、有名なゾンバルトのテーゼであった。体系的思想家としても歴史家としても、グットマンにおける究極的にしてもっとも深遠な関心は、ユダヤ教の哲学についてであった。あまりに多くのことを考え教えたが、しかし相対的に見て彼はあまり書かなかった。とはいえ、きわめて不本意な仕方を書いたこの男のもっとも重要な作品は『ユダヤ教の哲学』であるはずである。

まさにこの書物〔『ユダヤ教の哲学』〕のタイトルがひとつのプログラムを含んでおり、その基本的な方向性——宗教哲学者の方向性を示している。ちょうど法哲学者が法について哲学し、芸術哲学者が芸術について哲学するのと同じように、宗教哲学者は宗教について哲学するのである。このようなあらゆる哲学することが含意した前提は芸術、法、宗教のような現実

性の諸領域が存在し、それについて哲学できるということである。あなたが宗教（あるいは、さらに言えば芸術もしくは法も）は他の何かに「すぎない」と言いさえすれば、それは自動的に真の哲学的問いの正当な対象であることをやめ、代わりに心理学や社会学のような何らかの実証科学によって説明されるべき——あるいはむしろうまく説明されるべき——現象になる。

それゆえ、みずからの職業に誠実であるために、宗教哲学者は宗教の特質に関する見解をもたなければならない。宗教にその特殊な性格を与え、倫理、道徳、あるいは芸術とははっきりと異なって、宗教を「宗教」たらしめるものとは何か。グットマンの偉大な師ヘルマン・コーエンは宗教の新カント派的倫理概念から出発したが、その後期の著作においてますます宗教理念の特殊性を把握しようとし、彼はユダヤ教の解釈を通じてそれに取り掛かった。グットマンも明らかにシュライアマハーやルドルフ・オートーから恩恵を受けていた。彼らは、宗教の権利は無類なものとして客観的に考察されるべきだと再主張した偉大な哲学者にして神学者である。しかし、おそらくグットマンの思想に対するもっとも重要にして、またもっとも鋭い影響はフッサールのそれである。彼の現象学は、もともとの事実として、人間の意識に現在したアプリアリな要素や構造を認識する方法を提供しようと主張した。これはグットマンによって注意深く十分に議論された近代実存主義批判の最終的典拠であり、1944年にヘブライ語ではじめて出版された（いまでは次のタイトルのもと英語で利用可能である。“Existence and Idea: Critical Observations on the Existentialist Philosophy,” in *Scripta Hierosolymitana*, Vol. VI, 1960）。

これらすべてのユダヤ教への適用は明確であり、またその点に関して本書『ユダヤ教の哲学』でグットマンはわれわれに疑問を残すことはない。彼は、ユダヤ（的）哲学あるいはユダヤ人哲学者に関わっているというよりもむしろユダヤ教の哲学に関わっている。ユダヤ教は所与の何かであり、与件であり、ユダヤ人哲学者がユダヤ教について哲学をはじめる以前にそこにある何かである。「ユダヤ（的）」哲学は、数世代にわたってユダ

ヤ人哲学者がユダヤ宗教を見つけ、その後「それを説明し正当化する」につれてユダヤ宗教という事実を受け入れていくプロセスから成っている。

彼のより詳細な論文（たとえば、ユダ・ハレヴィ、マイモニデス、ゲルソニデス、スピノザ、メンデルスゾーンなどの議論）だけでなく本書〔『ユダヤ教の哲学』〕において、グットマンは何よりもまず哲学史家である。しかし、ヒュージックの『中世ユダヤ哲学史』あるいはN. ローテンシュトライヒによる重要なヘブライ語での著作『近代におけるユダヤ思想』とは異なり、グットマンの研究は聖書から現在にいたるまでのユダヤ教の哲学を包含している。もともとのドイツ語版（1933）がヘルマン・コーエンで終わっていたのに対して、のちのヘブライ語版（現在の英語版はこれに基づいている）には最後の偉大なユダヤ教の哲学者フランツ・ローゼンツヴァイクに関する章が追加されている。グットマンがユダヤ教の本質に関する彼自身の見方を明確に主張するところはどこにもない。すなわち、創造力のある体系的思想家というよりも歴史家として、彼はその著作において潜在的なままにするために「ユダヤ教の現象学」を好んだのである。しかし、彼はけっして歴史的相対主義者ではなかったし、ユダヤ教の本質をしっかりと信じていた。その適切な理解は、それによって本質主義的ユダヤ性（あるいはまた非ユダヤ的逸脱の程度）を測定するものさしを提供するだろう。この確固とした確信とともにグットマンは、ユダヤ（的）哲学はそれ自体として、純粹かつ内在的な意味においてユダヤ教の創造物ではけっしてなかったと議論することさえできた。ユダヤ（的）哲学は、ユダヤ人の生の最奥の源から自発的に湧き出なかったのである。それはつねに異質な影響力を誘い込んだが、しかしつねに外部から受け取ったものに対して個々の特殊ユダヤ的な性格のしるしを押し付けた。これまで「ユダヤ教の諸原理」に関するグットマンの考えの一つの平易な説明だけが出版された。いまではこれはデーヴィット・ウルフ・シルヴァーマンによる英訳で利用可能である（*Conservative Judaism*, Vol. XIV, No. 1, Fall, 1959）。またグットマンは哲学の特質や特徴について明確な見解をもっていたし、それらの見解は疑いなく彼が神秘主義やカバラ思想のような重要な現象を彼の著作から除外

した理由でもあった。このことはなぜ最後の世代の思想家のなかで、フランツ・ローゼンツヴァイクがユダヤ教の哲学を代表することが認められ、ラビ・クックではないのかという点を説明する。

哲学者と歴史家は、ユダヤ教の「本質」を構成する不変的要素やその構造の特質に関する問い、またはまさにそれが存在するという問いについてすら一致しないかもしれない。変化する可能性があるのは——ユダヤ教の哲学を含む——哲学だけではない。初期の哲学的表現の特質とその歴史的機能に関する歴史家の見解もまた変化するかもしれない。おそらく近い将来あるいはもっと遠い将来のいつか、新しいユダヤ教の哲学史が書かれなければならないだろう。しかし、グットマンの著作は傑出しており、それは穏健にして繊細な学識を圧縮している信頼度の高い研究としてだけではない。彼の著作はユダヤ的学識の歴史における大切な時代の成果であり摘要を示している。そのようなものとして、それはユダヤ哲学史における重要な一局面の永続的記念碑であり、ユダヤ教だけでなく、みずから自身をも説明しようとする試みとして残り続けるだろう。

R. J. ツヴィ・ヴェアブロウスキー

エルサレム

ヘブライ大学